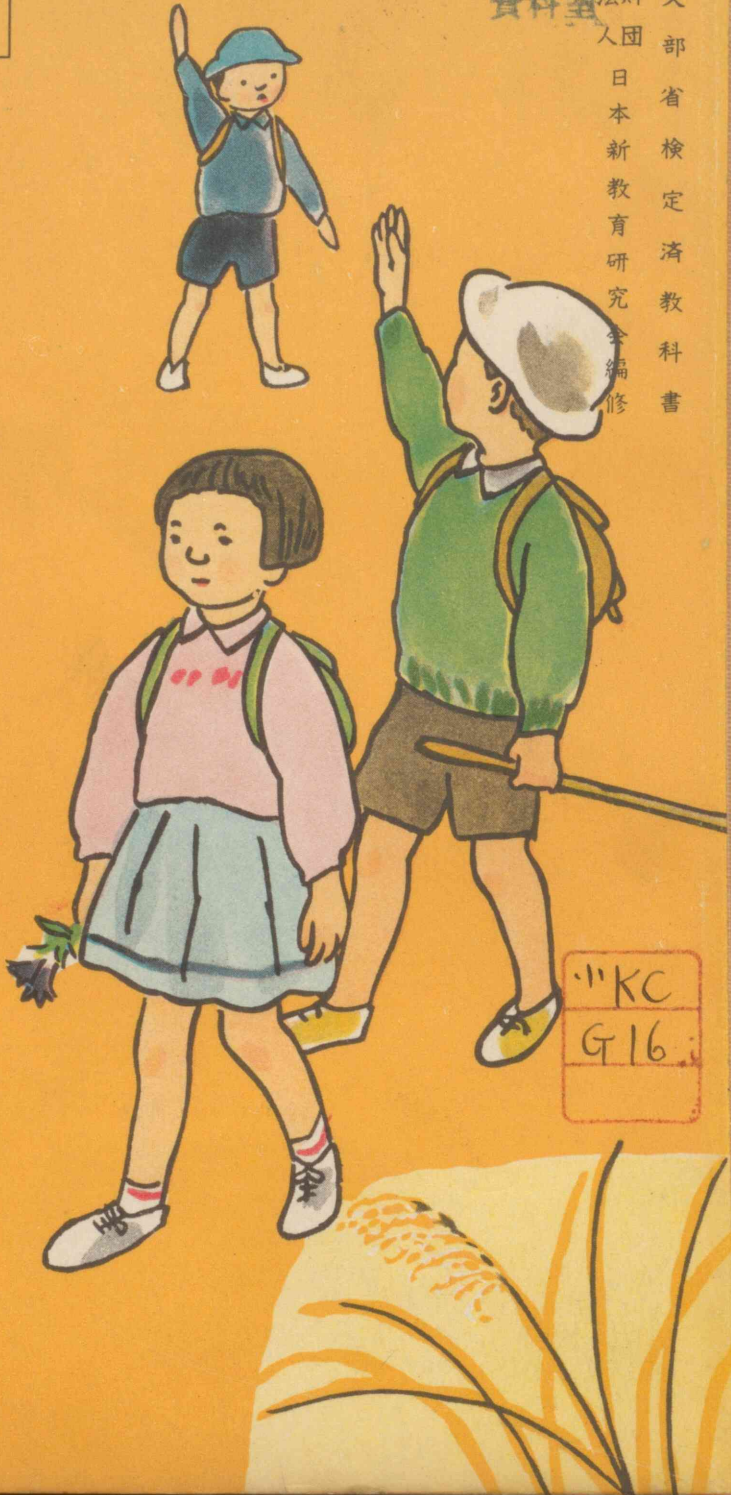


11	小国314
学図	

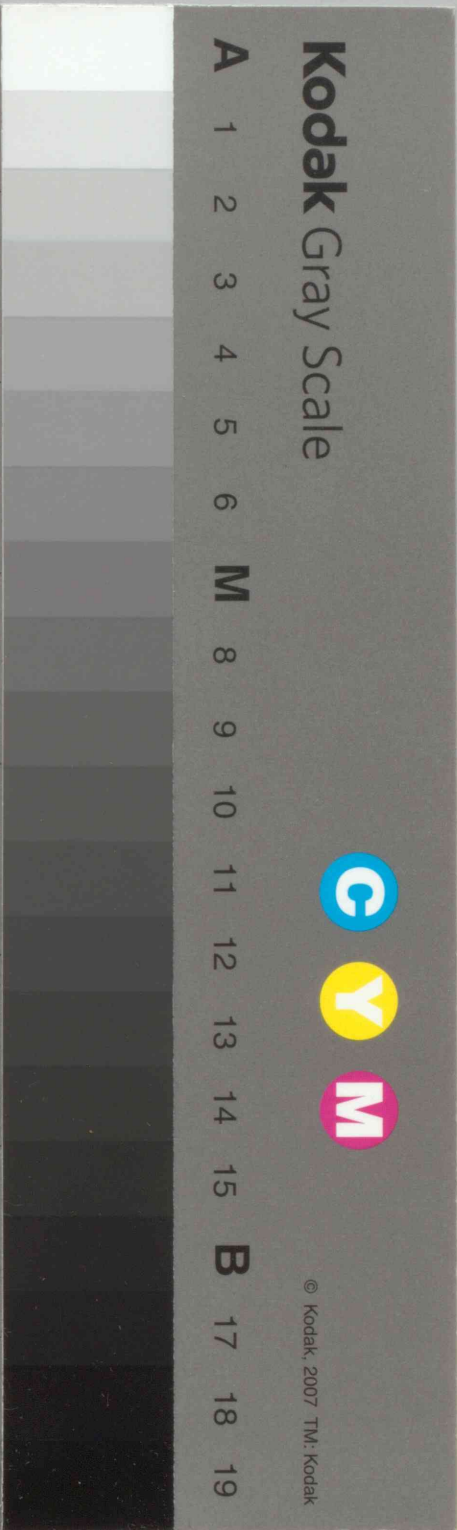
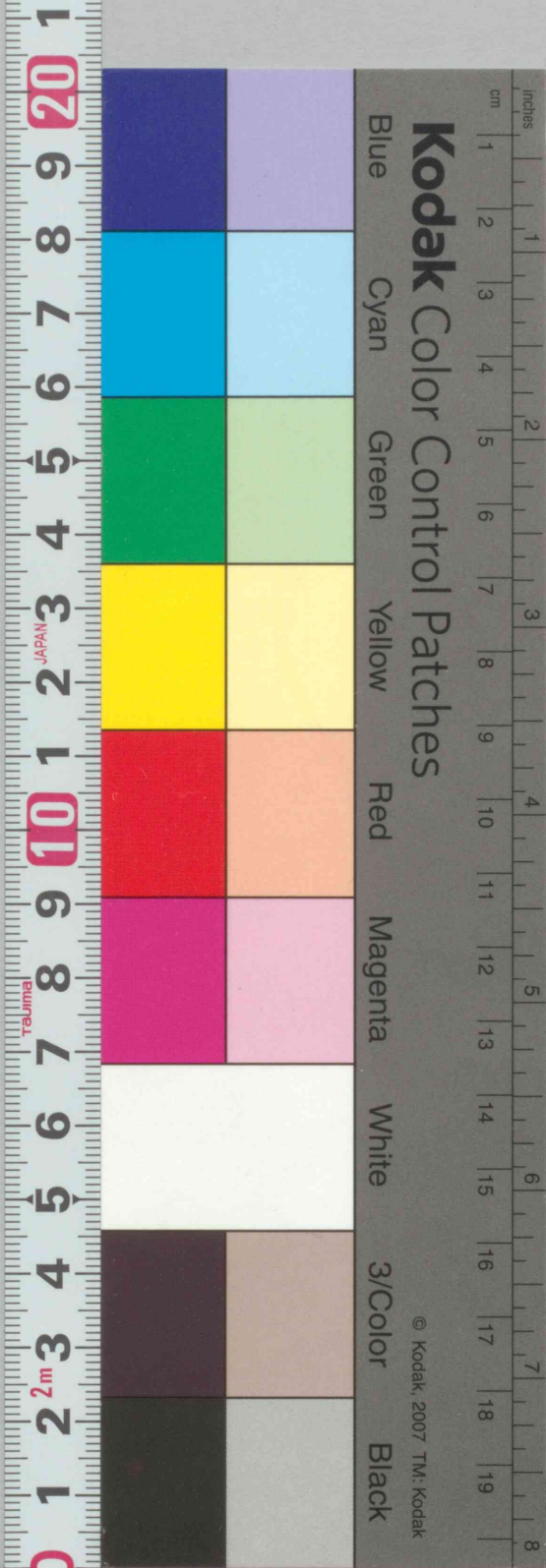
教育部
資料室
法財 文
入団 部
日本新教育研究會編修
省検
定済
教科書

六
の
へ
の
の



KC
G16

学校図書株式会社発行



60251

教科書文庫

6
810
34-1950 01304 49810



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449810

昭和

年

月

日
文
部
省
検
定
済
小
学
校
国
語
科
用

中央図書館

広島大学図書

0130449810



学
校
図
書
株
式
会
社

六



第
三
学
年
用
下

廣
島
大
学
教
育
学
部
図
書

広島大学図書

0130449810





もくろく

秋

(一) 虫取り

(二) お茶はこび

(三) となり村へ

(四) 運動会

二 冬が来る

(一) 森の小道

(二) 音

(三) 弟のことば

(四) いの字の世界

三 雪がふる

(一) うさぎ

(二) 雪の歌

(三) 冬の山

(四) 炭をやく人

(五) 南から

四 楽しい遊び

(一) おもちの活動しゃしん

47

52

57

61

69

71

73



五 わたしの本

(一) わたしの本

(二) ゆうびんやさんのぼうし

六 春を待つ

(一) げきの会

(二) 春の川

新しく出たことば

かん字

教師のページ

127

131

132

(二) 物まね

(三) 北風の中で

85

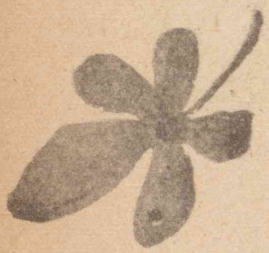
90

94

98

106

125





一 秋

(二) 虫取り

ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ

スウィッチョ スウィッチョ

リーン リーン リーン

チーツー チーツー チーツー

あちらでも、こちらでも、虫が鳴いてい

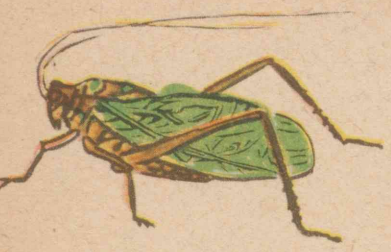
ます。野原の中に、ちようちんが二つ見えます。

「ほら、すいっちよだよ。」

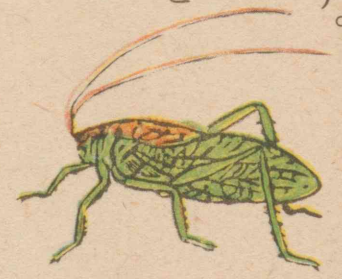
しげるくんの声がしました。「スウィッチョ」と
いう鳴き声だけが、はつきりきこえています。

しげるくんは、ちようちんを前の方へ出して、

そうつと近づきました。「スウィッチョ」という時は、ふるえるよ



うな音をだします。すすきの葉が重なり合っ
いて、虫は見えません。もつとよく見ようと思
って、一足出た時、ガサツと音がして、すすき
がゆれました。すいっちよは、ぱったり鳴きや
んでしまいました。



ふたりが、また歩いていくと、道のすぐそばで、

「ガチャ ガチャ ガチャ」

と、鳴いていました。としおくんが、

「こんどは、ぼくがどろう。」

といました。音をたてないように、近よりました。すぐ近くに
いるようです。

「あつ、いた。」

と、思わず声が出そうになりました。ちようちんのうすぐらい光に照らされて、緑色の虫が、すすきの葉の上に見えました。としおは、思いきってつかみました。むねがどきんとしました。長い足が、手の中でびくびくしています。虫をちよ

うちんの中に入れました。「にげないかな。」と思って、のぞくと、ろうそくのおいが、ぷんとしました。よく見えないので、外がわから見たら、虫のかげがはつきりうつっていました。

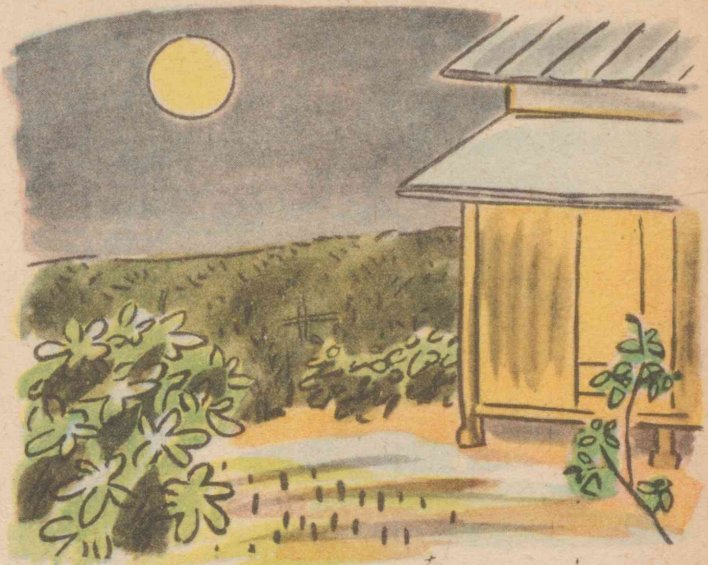
「取ったぞ。ほら。」

といました。しげるくんの返事があります。しげるくんのちようちは、向こうの方に、赤く見えませんでした。

「しげるくん、取ったぞう。」

とよんでも、しげるくんはだまって
います。走っていくと、向こうのちようちんがゆれました。





「ぼくも取ったよ。」

しげるくんの声がしました。

ふたりは、ちようちんの中の虫
を見せ合いました。

「土色だね。それ、なあに。」

「ガチャガチャって鳴っていたよ。」

「ぼくのも、ガチャガチャって鳴
いていたよ。色がちがうなんて、
へんだね。」

それから、ふたりは、わかれわかれになつて取りました。

としおくんが四ひき、しげるくんが三ひき取りました。しげ

るくんは、すいっちよも一ひきつかまえました。すいっちよ
は、やはり緑色で、からだが細い虫です。

としおくんは、家へ帰つてから、前のかきねの所へ放して
やりました。なかなか鳴きませんでした。しばらくすると、
一ひきが鳴きだしました。ほかのも一しよに鳴き始めました。
夜ねる時も、にぎやかに鳴いていました。

○ いつごろのことでしょう。

○ しげるくんは、よばれてもなぜ返事をしなかったのでしょうか。

○ 緑色や土色をしていると、虫にとって、どんなつごうのよいこ

とがあるでしょう。

○ ガチャガチャと鳴くのは、くつわ虫です。

スウィッチョと鳴くのは、うまおいです。

○ 虫の鳴き声をよく聞いてみよう。

○ いろいろな虫の形や色やようすなどをしらべて日記につけてみよう。

(三) お茶はこび

まさおくんが、学校から帰って来ると、おばあさんが、待っていたように、

「たんぼで、おかあさんたちがおなかをすかして待っているから、早く持つていきなさいよ。」

と、いいました。

おいもがふかしてあつて、お湯もちんちんにえたっていました。

おいもはざるに入れて、ふるしきに



包み、お湯をやかんに入れて、持っていくのです。茶わんも
入れました。それは、おばあさんがみんなしてくれました。

まさおくんが少し急いだので、やかん
がパチャピン、パチャピンとゆれ、お湯
がこぼれて、足にかかりました。まさお
くんは、

「あつっ」。

と、いいました。

たんぼに、おかあさんの白い手ぬぐい
が見えました。

「おかあさん」。



と、大きな声でよんだら、

「はいよーっ」。

と、返事をしました。

「お茶を持って来たよーっ」。

と、いったら、おとうさんもこつちを見て

「来い来い」と、手まねきました。

まさおくんは、お茶をこぼさないようにして、急いでおか
あさんの方へかけていきました。

「おいも、うんと持って来たよ。ほら」。

と、いったら、

「ごくらうさん」。





と、手ぬぐいを取って、あせをふきました。
まさおくんとおとうさんとおかあさんと
は、田のあぜにこしをかけて、おいもをた
べ始めました。

おばあさんが入れたうりのおこうこも、

「うまい、うまい。」

と、たべました。

いなごがぴよんぴよん飛んで来て、ひぎ
に止まったりしました。まさおくんは、お
いもをたべたべ追っかけました。

おかあさんが、

「お茶を飲んでしまっただけから、ゆっくりいなごをお取りよ。」
と、いったので、

「うん。」

と、いって、また田のあぜへこしをおろして、おいもをたべた
り、お茶を飲んだりしました。



○ パチャビン、パチャビンというのは、おもしろい

ですね。きこえたとおりの、思ったままで、あら

わすようにしましょう。

○ おてつだいのことで、文を作ってみましょう。

(三) となり村へ

きょう、三年生は、となり村の大田小学校へ行きました。

大田小学校には、うしろのおかから出た貝がらを集めてあります。三年生はそれを見にいったのです。

向こうへついた時、校長先生が出ていらっしやつて、

「やあ、みなさん、よくいらっしやいました。きょうは、わたしの学校で、うんと勉強し

ていってください。」

と、にこにこしながらおっしゃいました。

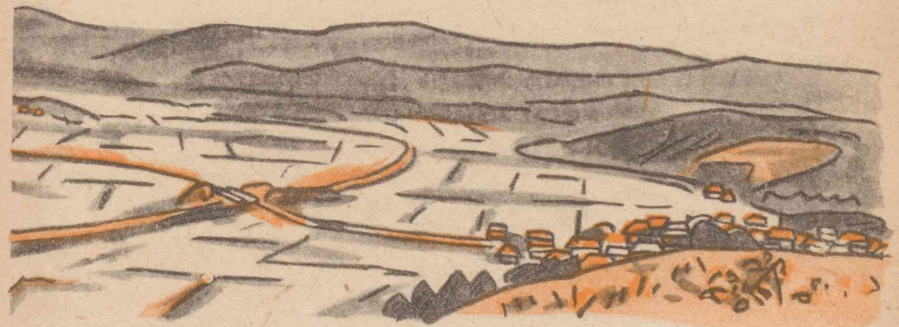
貝がらは、理科教室のうしろにならべてありました。

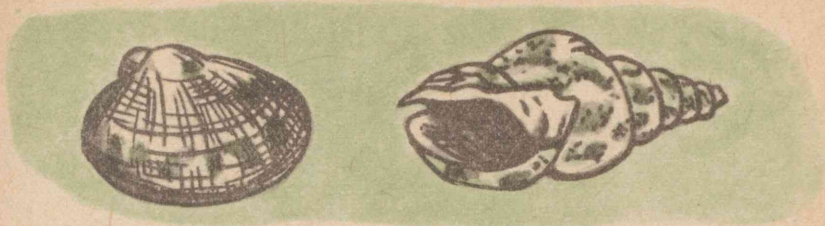
「これ、遠足の時、ぼくが拾ったのと同じだよ。」

「どれ、それならばくも取ったよ。」

みんなが、うれしそうに話していると中村先生が、

「ここにあるのは、たいてい今の海にも住んでいますよ。それが、こんな所から出るの





だから、ふしぎだね。」
と、おっしゃいました。

先生は、いつも「よく考えてごらん。」というように、おっしゃいます。

すっかり見てから、運動場に出てならぶと、休み時間なので、みんながまわりへよって来ました。おじさんのうちのまさおくんがとんで来て、

「もう帰るの。」

と、いつて、わらっていました。

中村先生は校長先生にごあいさつをなさって、から、まさおくんたちの方へ向いて、

「きょうは、どうもありがとうございました。みなさんも、わたしの学校の運動会には、ぜひいらっしゃい。」
と、おっしゃいました。

学校の門を出る時、みんなが、
「さようなら。」

と、いつて、手をふってくれました。としおくんたちも手をふって、

「さようなら。運動会には、きつとおいでよう。」

と、いいました。



役場の前を曲がった時、うしろの方で、べんきよの始まるかねの音がしました。

役場の横の道をいくと、まもなく、向こうにがけが見えました。土が、しまもようのように重なっているがけでした。そこまで来ると、先生は、

「このがけは、おかがくずれてできたのです。きつと、このへんは、大むかし海だったんですね。ほら、赤いようなすなや、黄色いようなすなが重なっているでしょう。それから、おもしろいことは、このへんの人たちは、貝がらを拾って、にわたりのえさにするそうですよ。さあ、それでは、

さがし始めよう。」

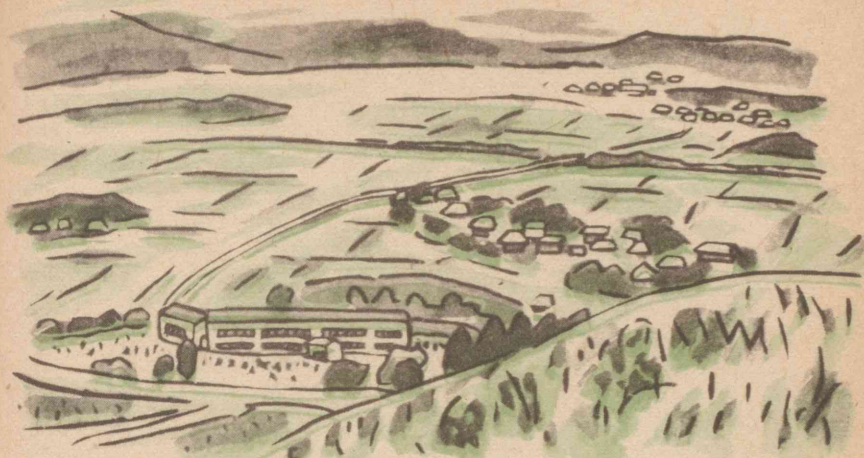
とおっしゃったので、みんなでさがし始めました。

「先生、ありました。」

と、もうだれかの声がしました。

としおくんは、少し下の方へいきました。「あさりはないかな。」はまぐりはないかな。」と、さがしていると、遠足の時のことを思い出しました

おべんとうは、おかのいちばん高い所でたべました。大田川の向こうには、としをくんだたちの学校の屋根が見えました。大田小学校は、すぐそばに見えました。生徒が、運動場にな



くさん出て来ました。きっと、おひるの休み時間でしよう。

「おーい。」

みんなは立ち上がって、手をふったりしてよびました。向こうでは、だれも気がつかないようです。集まったり、散ったり、走ったり、回ったり、まるで小人がはこ庭で遊んでいるように見ええました。

「さあ、これから、林の中へはいりますよ。このへんは、草が深いから、

みんなはぐれないようにするですよ。」

としおくんたちは、「わあっ。」と叫びながら、ばらばらになって、はいつていきました。

せいよりも高い草の中を、としおくんは、おのくんといっしょに進みました。としおくんは、みんなが近くにいるのだと思って、平気で林の中をいのししみたいに、むちゅうでわけていきました。

しばらくたって気がつくど、みんなの聲がしません。

「おのくん。おーい。」



返事がありません。

「中村先生——」。

やっぱり、なんの返事也没有せん。

ひぎのへんがちくちくするので、見ると、血が少し出ていました。ズボンには、草の実がいつぱいついています。すぐそばで、ひよどりが鳴きました。

「はぐれてしまったんだ。」と思うと、な

んだかこわくなって、ほんとうにいのししでも出て来そうな気がしました。

「こんな時には、あわててはいけない。」と、よくおっしゃるお



とうさんのことをばを思い出しました。

としおくんは元気を出して、そばの

木に登りました。

「おーい。」

と、よんでみました。

「おーい。」

みんなの返事がきこえました。

「おーい。」

もう一度よんだ時、木から落ちそうになりました。

「おーい。」

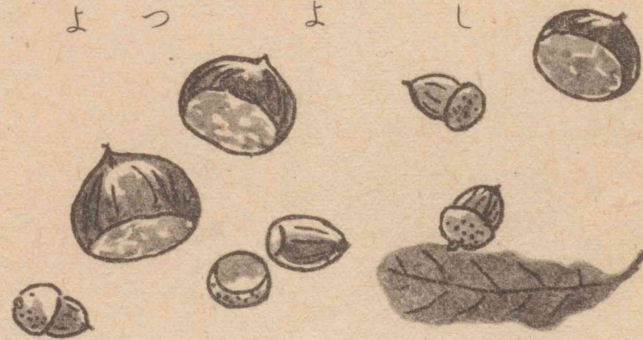
また、みんなの返事がきこえました。

としおくんは木からおりると、またいのししののように、声のした方へ進んでいきました。

○ となりの村や町へ行った時のことを思い出してみましよう。

○ しらべたりしたことはよく書きとめておくようにしましよう。

○ 長い文を書く時は、おもなことがらでいくつかにくぎって書くと、書きよいし、読んでよくわかります。



(四) 運動会

きょうは、としおくんたちの学校の運動会でした。となり村のおじさんが、見に来てくださることになっています。どこにいらっしやるかと思つて、さがしてみました。が、わかりませんでした。

そのうちに、としおくんたちのリレーになりました。としおくんは白組です。赤白青黄の四人が、スタートに立ちました。みんなが急にさわぎだしました。

「赤、しっかり。」

「黄色、がんばれ。」



「よいい。ドン。」

という、あいずがありました。ぬいたりぬかれたりするたびに、見物人の席から、

「わあーっ。」

と、いう声が起こります。いよいよとしおくん番です。むねがどきどきしました。バトンを受け取ると、むちゅうで走りました。前を赤が走っています。追いつきました。追いつくときは、外がわか

らときまっています。「ぬけるぞ。」と思った時、ちようど曲がりかどへ来たので、赤は曲がりきれずに、としおくんのすぐ前へ来ました。としおくんはよろよろとしました。足がぶつかったのです。ころびはしませんでしたが、力がぬけたよう気がしました。赤との間は、またはなれてしまいました。としおくんはそれでも、いっしょうけんめい走りましたが、どうとう追いつくことができませんでした。

つぎの人にバトンをわたすと、息がハッ、ハッとはげしくなっていました。白はどうとう二等のままでした。としおくんは、「ぼくが追いつけたのにー。」と、ざんねんに思いましたが、「走れるだけ走ったのだから、これでいい。」とも思いました。

また、一年生の玉入れの時のことでした。

高いさおの竹に、かごがつけてありました。一年生がかごをめがけて、ばらばらと玉を投げています。赤と白の玉です。かごにはなかなかはいりません。

そのうちに、赤い玉が一つ、ころころつと見物席の前へころがって来ました。すると、見物人の中から、四つぐらいの男の子が、ちよこちよここと出て来て、玉を拾いました。そして、かごの所へ走って行って、玉を投げました。玉はかごまでもとどきません。すぐ落ちてしまいました。男の子は、こんどは、下に落ちてゐる玉を拾っては投げ、拾っては投げ

てみましたが、どれもとどきません。気がついた見物人は、おもしろがって手をたたきました。

「ピーツ」と、ふえが鳴りました。

一年生は、もとの所へならびました。男の子は、どうしようかどうように、きよろきよろしています。自分の席がどこか、わからなくなってしまうのでしよう。おあさんらしい人が出て来て、見物席へ連れて帰りました。みんな



は、また手をたたいておもしろがりました。

としおくんが家へ帰ると、おじさんは、おとうさんやおかあさんと、えんがわでお茶を飲んでいらつしゃいました。

「としおくん、きょうはよく走ったね。」

おじさんはにこにこしながら、おつしゃいました。

夕ごはんの時、としおくんは、おとうさんに男の子の玉入れのことは話しました。おとうさんは大きな声でおわらいになりました。

○ 運動会でいちばんおもしろかったことを話し合ったり、作文に書いてみたりしましょう。

二 冬が来る



(一) 森の小道

わたり鳥がいく。大きなむれを作って、南の方に飛んでいく。じろうは、この夏、自分の家の中で生まれた子つばめのことを思い出した。いつのまにか、いなくなってしまったが、やはりあんなに大勢で、帰ったのだらうか。オーストラリアの方までいくというが、そこまで、ぶじに飛べたらうか。

ひよつと見ると、何かのさなぎが、くりの木のえだについていた。かれ葉か、落ち残った木の實のようだ。こんなにして、春までじつと待つのかなあ。取ろうと思ったけれど、やめてしまった。



日だまりに、あおだいしようがいた。ゆつくり日なたぼっこしている。足音を聞きつけて、のろのろとかれ葉の下にもぐりこんだ。夏なら、す



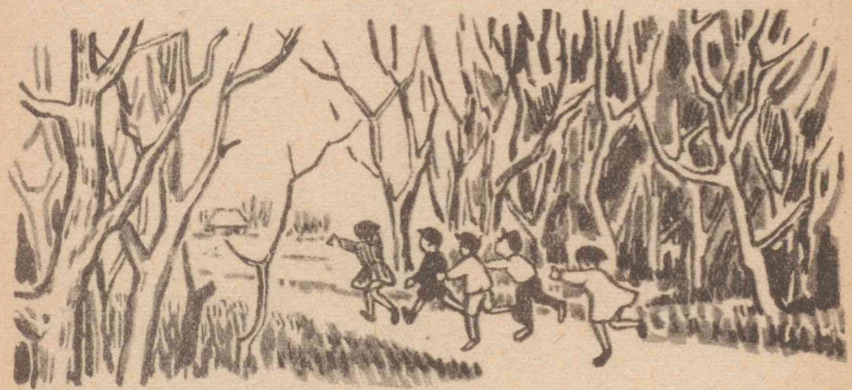
るするとにげてしまふのに。

さぎんかの花が、みんな落ちてしまった。木のまわりに、輪になって落ちている。一つ一つは、茶色になったのもあって、きたないが、輪になって落ちているのは美しい。このあいだまで、小さなはちがブンブンうなっていたが、どこへいったのか、一ぴきも見えない。



くぬぎ林は、葉が落ちて明かるくなつた。不意に向こうの豆畑から、きじが飛びだした。豆をたべに来ていたのだ。すぎ林にはいると、急に暗くなって、首のあたりがひやひやする。急ぎ足で通りぬけて、日のあたる所へ出てから、ゆつくり歩く。友だちと冬のことを話しながら帰る学校の帰り道。

○ きせつのかわるのにつれて、まわりのよ
うすのかわるのに、気をつけてみよう。



(二) 音

しげるくんが作文を読みました。

その中に、「風で電線が、『クーン、クーン』とうなっている。と、書いてありました。

あとで、ひろしくんが、「クンクンはいぬのなき声みたいだ。」と、いいました。みち子さんは、「電線はヒューン、ヒューンとうなります。」と、いいました。先生は、

「音をあらわしたことは、いろいろありますね。それは、だれかがそのように聞いたので、聞いたとおり、思ったとおりをそのまま、あらわしたものです。人によって、聞き

方がいろいろちがうのですね。

みなさんは、この前、海へ遠足に行きましたね。あの時、波の音がどんなにきこえましたか。

と、おっしゃいました。みんなは、「ザブン、ザブン」、「ドドーン、ドドーン」、「ザーツ、ザーツ」などといいました。

それから、みんなで音をあらわしたことを、集めてみました。

水の流れる音

チヨロチヨロ

サラサラ

ゴボゴボ

ゴーゴー

風のふく音

ビュービュー

ゴーツ

ソヨソヨ

サラサラ

物の落ちる音

ドシン

ガタン

ガツチャン

カサリ

ドカン

コトリ

ポトン

フワリ

これは、めいめい思いついたのを、黒板に書いたものです。先生はにこにこして、見ていらつしゃいましたが、はるえさんが、「フワリ」と書いたのをごらんになると、急にみんなの方を向いて、

「どうですか、『フワリ』は、そういう音がしますか。」

と、おききになりました。すぐに、

「はい、します。」

と、二・三人がいいました。先生は、それでもにこにこしただ

けで、なんともおっしやらないので、みんなはまた考えました。「ふわり」「ふわり。」と、口の中で、くり返している人もありました。そのうちに、としおくんが、「音はしない。」と、いっただきました。

みんなはよくわかりません。先生は、おうちでよく考えて来るようにとおっしやいました。

○「ふわり」といふ音はしますか。しませんか。

○ そんなことばが、みんなの書いた中には、もうありませんか。

○ 教室の中で、じっと耳をすまして、聞こえて来る音を書きつけてみましょう。

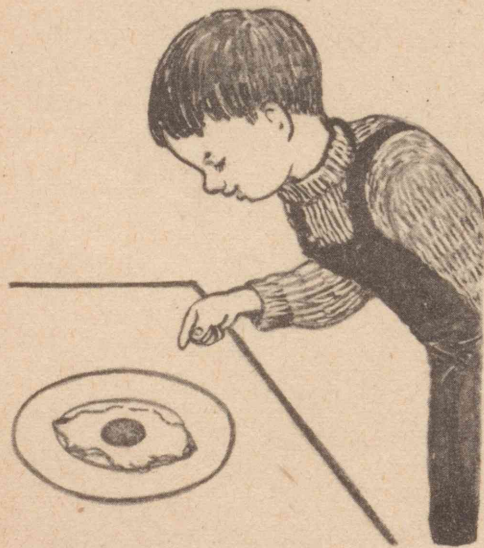
(三) 弟のことば



としおくんの弟のけんちゃんは、六つです。

ときどき、おもしろいことをいっては、みんなをわらわせます。としおくんは、おもしろいなど思ったことを、書きとめてみました。

ねえちゃん、ねえちゃん。
見てみな。



ほら、おさらのたまご、
お月さまだよ。



どんな時にいったのでしょ。

おばあちゃん。

つばめは、はんてん着てるね。

つばめは、はんてんをどこで、

買ったのでしょ。

それとも、だれかに借りたのでしょか。

にいちゃん。

おうまは、

はだしで、いるんだね。

おうまにくつを作ってやったら、

どんな形のくつがよいでしょ。

ほかの動物もはだしでいるように

すからくつを考えてみましょう。

○ けんちゃんのことばで、お

もしろいと思うのはどんな



ことですか。

けんちゃんよりも、もっと小さな人のことばをよくしらべてみましょう。

よく口がまわらないところ。

どんなことをおもしろがるか。

ほかの人にわかるかどうか。

(四) いの字の世界

先生「いの字の世界の たんけんだ。

しっぱに いの字のつくことば。

みんなで さがしに 出かけよう。

はな子「お空が 青い。

どこまで 広い。」



たろう「あの雲 白い。
あの鳥 黒い。」

つき子「あの山 高い。
あのおか ひくい。」

じろう「ほら、汽車早い。
長いよ、長い。」

ゆき子「でも でも のろい。
ひこうきよりも。」

先生「いの字の世界の たんけんだ。

しつぽに いの字のつくことば。

ここらで 休んで さがそうよ。」

さぶろう「木のかげ 暗い。
すずしい かげだ。」

とり子「りんごが 赤い。
かわいい りんご。」





先生「いの字の世界の
たんけんだ。
しっぱに いの字
のつくことば。
歌って 歩いて
さがそうよ。」

みなさんも、こんなにして
字の世界のたんけんをして
みませんか。「る」の字など
おもしろそうですよ。



しろろ「そうして、まるい。
たべたら、うまい。」

みき子「ぬすんじゃ、悪い。
見てれば、ほしい。」

ごろろ「いの字の 歌を
うたおよ、ゆかい。」

みんな「うれしい なかま。
お空が きれい。」

三 雪がふる

(一) 子うさぎ

としおくんは、きょう、まさおくんの家から、子うさぎをもらって帰るとちゅうで、みちおくんに会いました。

「かわいいだろう。ほら。」

と、としおくんが、みかんばこから出して、見せていた時、急に近くでいぬがほえたてました。

「あつ、しまった。」



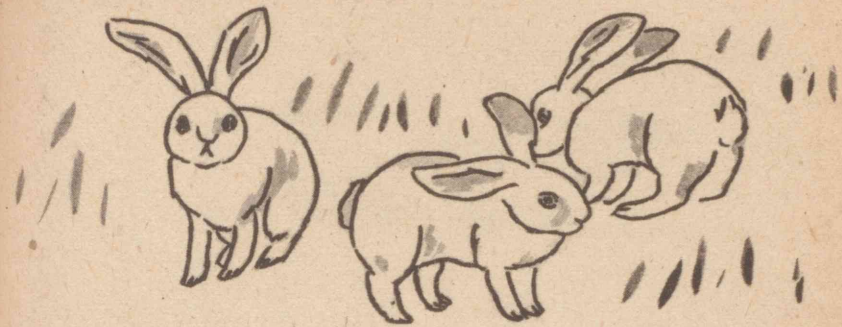
と思った時には、子うさぎは、もう道ばたのささやぶの中へにげこんでしまいました。ふたりでいく度もさがしましたが、その辺には見あたりませんでした。

くもった寒い日でした。

としおくんは、今、戸口の所で、大田村のおかの方を見ながら、子うさぎのことを考えていました。

あの時、ぼくがはこから出さなければ、よかつたのに。





でも、いぬがほえついたんだから、しょうがない。

それでも、もつとさがせば、見つかったかもしれない。

あんなにまさおくんが、かわいがっていった子うさぎ。

三びきのきょうだいと別れた、ひとりぼっちの子うさぎ。

あしたは、きつと、あやまりにいいこう。そうして、もう一度、さがしてみよう。

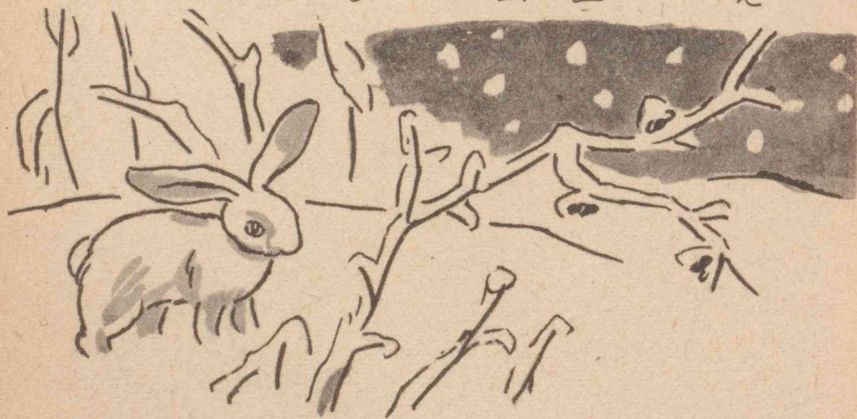
雪がちらちらふって来ました。

向こうのおかは、もう、少ししか見えません。

としおくんは、前にあのおかで、先生やみんなとはぐれた時のことを、思い出しました。

「あの子うさぎ、今ごろ、どうしているかなあ。いのししにでも、追っかけていられていないかしら。」

としおくんは、雪をかぶったささやぶで、ふるえながらおかあさんをさがして



いる、あの子うさぎのことを考え続けていました。

もう、おかはなんにも見えません。

雪はまだやみません。

「ごめんね。」

としおくんは、おかの方を向いていいました。

○わたしたちは、お話をしない時でも、心でいろいろ考えて話して
いるのですね。

○この子うさぎはどうなったでしょう。

(二) 雪の歌

戸をあけた。

ぱつと明かるい。

外は雪だ。

ほしてあったたびが、

雪をしょって、

白い小さいうさぎのようだ。

(ひろし)





ふむたびに、
雪がギクギクと鳴る。
ぶなの木のえだに
雪がかかって、
さくらがさいたようだ。
ぶなの林が、
向こうまで続いているので、
どこまでも、どこまでも、
さくらがさいているようだ。

(しげる)



お月さんが光る。
大雪のやんだ夜。
ギシギシと足音がきこえた。
だれだか、急いで通って行った。
大きな足あとが
まっ黒に見える。

(かず子)





日が落ちかかった。

おかあさんといっしょに

山をおりる。

先にいったおとうさんは、

木の間からちらちら見える。

どてでひと休みした。

家の方を見ると、屋根から、

ごはんをたくけむりが上がる。

雪の上を歩いていくと、サクサク音がする。

おかあさんが、うんうんうなっている。

ふたりのかけが、雪の上につつっている。



(三) 冬の山

ゆうべは、ふぶきのために、早く電

燈が消えてしまった。いろりのそばで、

あしたこそ、山に連れていってやると、

おとうさんにいわれて、じろうはどび

上がって喜んだ。

今までは、まだ小さかったので、連れていってもらえなか

ったのだ。



けさは、風もすっかりおさまり、空もきれいに光っている。

雪はきらきらと青白く、まわりの山々は静かだ。

いぬのくろも、はじめてのおともだ。くろは早くから雪の中でふざけている。

「くろはジョンよりもかしくくない。すぐとびだして、えものをはがしてしまふようなことをやるぞ。」

前から、おとうさんはこういって、くろのことはすっかりあきらめていようだった。

まだ、だれも歩いていないところばかりだ。森の大きな木も、雪をかぶって重そうだ。えだの間から朝日がもれて、谷川の冷たい水にうつっている。

「むかしは、このあたりに来ると、もうたぬきがいたものだ。」

といいながら、さつさと歩いていく。雪はそれほど深くはないが、歩きにくい。おくれたら、たいへんだ。もうつれて来てもらえなくなる。いっしょうけんめいに歩いた。

歩くことばかりに気をとられていたら、くろが、急にあわてはじめた。雪の上に、鳥の足あとがはつきりと見られた。

ガタガタガタというような音とともに、美しいきじが飛びたつた。

「しまった。」といい終らないうちに、また一わ。

「パーン」

鉄ぼうの音が、遠い山にこだまする。



はっと思うまに、きじは、まっさかさまに落ちてくる。くろが、一直線にえものの所に走る。おとうさんも走る。それはみごとなきじだった。

それから、そんなにうまいことばかりではなかった。

りすのすがたが、ちよつと見えたり、いたちが、ちよろつとかくれたりした。くろはいそがしそうに、クンクン、鼻を鳴らしながら歩いている。

じろりの足もだいぶつかれてきた。

かきの木の下で、たき火をしながらおべんとうをたべた。



昼からは、向きをかえてみた。じろりは、ひとりだけ残されて、おとうさんのもどつて来るのを待っていないければならないことがあった。寒いし、さびしいし、なきだしたくなるほどだった。しかし、山のいただきに、くつきりと、おとうさんとくろのすがたが見えた時は、とてもうれしかった。

「だいぶ遠くへ来たから、そろそろ帰ろう。」

と、おとうさんがいった時は、もう太陽も西の山に近づいていた。

村の入口の土橋のところに来た時だっ



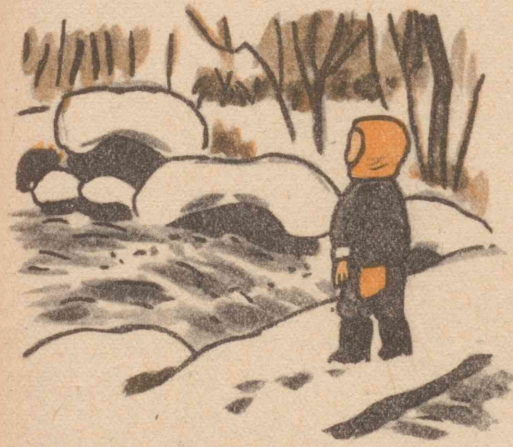


がさと、ものすごい音をたてて、落ちて
来た。くろだけではない。
あつ、何か。
あつ、たぬきだ。
じろうは、何かいおうとするが、声
が出ない。
「早く、早く。」
やつと、それだけさげんだ。
おとうさん、早く、早く。
もしも、くろがやられたら。
がんばれ、くろ、がんばれ、くろ。

た。おとうさんは、ぴたつと立ち止まった。土橋の下の雪の
上に、いぬの足あとに似たものが見える。
くろも気がついたらしい。しきりににおいをかいでいる。
その足あとは、川の流れてたち切られている。向こう岸へい
ったものらしい。

ザブザブ、浅いところをわたつてい
く。じろうは、ひとり土橋の上で見て
いた。くろは、左の大きな岩の方へ、
おとうさんは右の方へ、足あとをさが
しながらいく。

その時、岩かげから、くろが、がさ



しかし、おとうさんがくろの所に来た時は、くろはたぬきをたおしていた。あの、「ばかだ、ばかだ」といわれたくろが、じろうのかわいがつていたくろが、どうとうたぬきを組みふせてしまったのだった。そのたぬきは重くて、じろうには持てなかった。

くろはうれしそうにぼえたてる。もう太陽は山にはいったらしい。川上からふく風が冷たい。

○ 紙しばいに作るとすれば、いくつの場めんにしますか。

(四) 炭をやく人

○ じろうの作文

人がいるとは思われないような山おくで、働いている人がいた。

きのう、おとうさんと山にいった時だった。けむりが出ていたので、近づいてみたら、炭やき小屋だった。

ちようど、かまをあけるところだったので、見ていた。かまは、たても横も、おどなのせいよりも大きい。中はまっかで、きみが悪かった。長い鉄のぼうで、まっかになった炭を、引き出しては、すなのようなものにまぶしていた。おじさん

の顔がまっかだ。冬なのに、あせが出そうだ。

かやぶきの小屋で、お茶をごちそうになった。とてもおいしかった。「このあたりにはきつねが出る。」と聞いていた。向こうの山からは、木をたおしている音がきこえて来る。見ると、大きな木がすうーとたおれていく。ボキボキとえだの折れる音がする。こんなにしびしい所で、こんな雪の中で、働いている人がいるのだなと思った。



○ 雪の中で働いている人たちのようすを話し合ってみよう。

(五) 南から

やす子さん

あなたが行ってから、もうずい分たちましたね。おうちの人もタマも元気ですか。あなたのお手紙を、きのう、先生が読んでくださいました。もう二回も雪がふったんです。でね。こちらはまだです。でも風は冷たくなりました。

学校の工事場では、まだ大工さんが働いています。

「学校は、いつごろ、できるのでしょうか。」

「雪がふるまでに、たつといいね。」

などと話し合っています。

おひやくしようさんは、麦まきがやっとすんだようです。
ことしは、お米がたくさん取れたと、みんな喜んでいます。
うら山のまつたけもたくさん取れました。
はぜの実が、葉のなくなった木にぶらさがっています。ぶ
どうのようです。
まだまだ寒くなりますね。おからだに気をつけてください。
またお手紙ください。

十二月十日

山下友子

さとうやす子様

〇どこから、だれに、来た手紙ですか。

(72)

四 楽しい遊び

(一) おもちやの活動しやしん

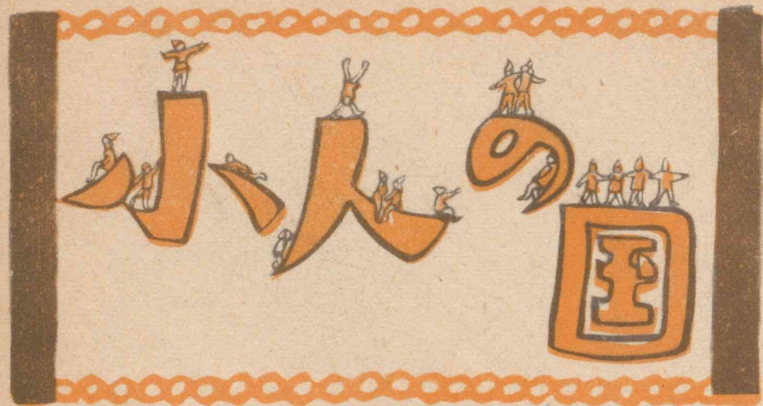
さつきまで、本を読んでいたとしおくんが、こんどは、あきばこのふたで、何か作り始めました。

何を作るのでしょうか。

はじめ、あきばこのふたに、たて五センチ、横八センチぐ
らいの四角なあなをあけました。

つぎに、ふたの両はしのうしろの方に、はりがねをたてに
一本ずつつけました。それから、はりがねの下のはしを曲げ





はりがねにまきつけました。

「さあ、できたぞ。」

といいながら、一方のはりがねを少しずつ回し始めました。紙が、うまく左からだんだん右の方へ動いて行きます。

「小人の国」

という、見出しが出て来ました。

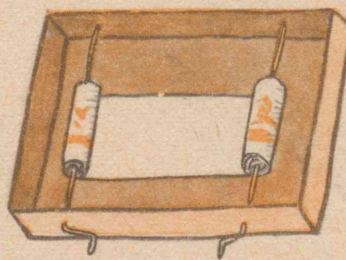
としおくんは、むねをおどらせながら回し続けました。

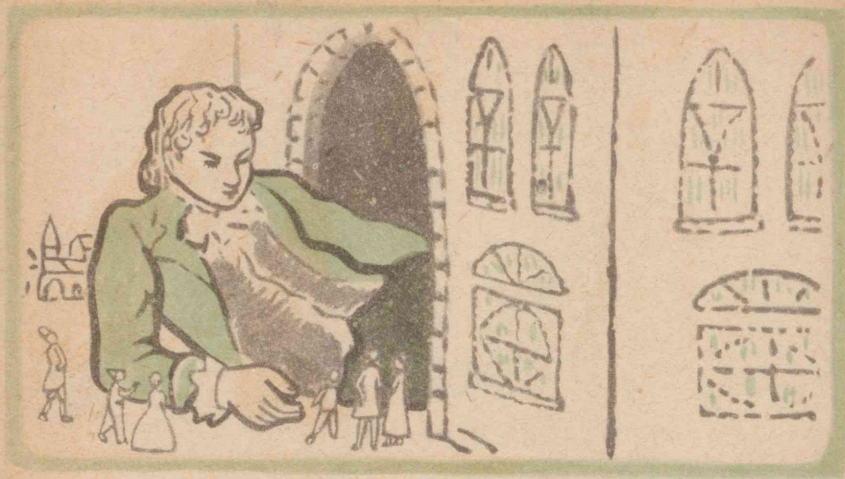
て、手で回すようにしました。ときどき回してみても、回りぐあいをためしています。わかりました。としおくんは、おもちの活動しゃしんきを作っているのです。そのうちに、これでいいというような顔をして、こんどは紙を七センチぐらいのはばに切つて、それを細長くつなぎました。

としおくんは、それに絵をかき始めました。

さつき読んでいた、「小人の国」の絵です。横にじゆん番に、八つかきました。

かいてしまうと、紙の両はしを、さつきつけたはりかねにのりではつて、静かに一方の





小人たちは大きすぎで、ガリバーを都に運びました。

とまるおうちはお寺ですが、ちよと小さいぬ小屋ぐらいですから、からだか半分しかはいりません。

ガリバーが、そこでからだをねかせていると、都からも、いなかからも、毎日たくさん的小人たちが、長い行列を作つて、めずらしい大男の見物にやつて来ました。

いたずらをする小人もいました。



ガリバーの乗った船は、ひどいあらしにあつてこわれてしまいました。

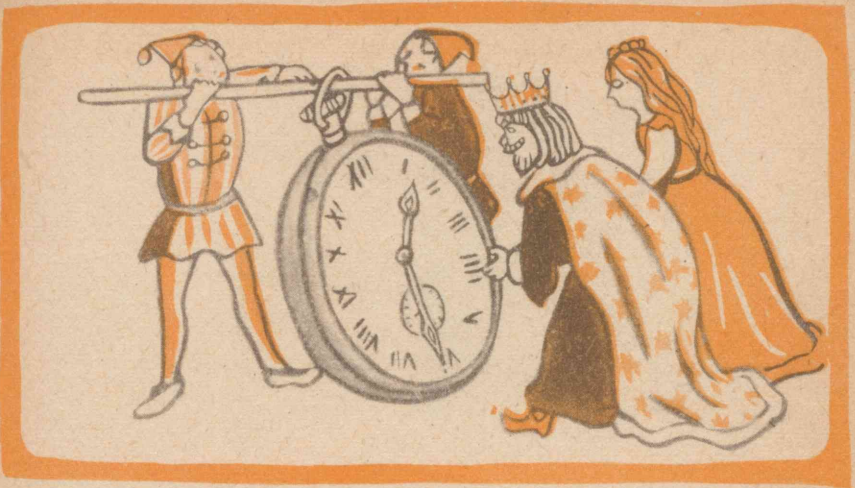
ガリバーは、いつのまにか、小人の国のはまべに流れついていました。

つかれたので、草の上でぐっすりとなむつてしまいました。やがて目がさめて、起きようとしたが、からだか少しも動きません。

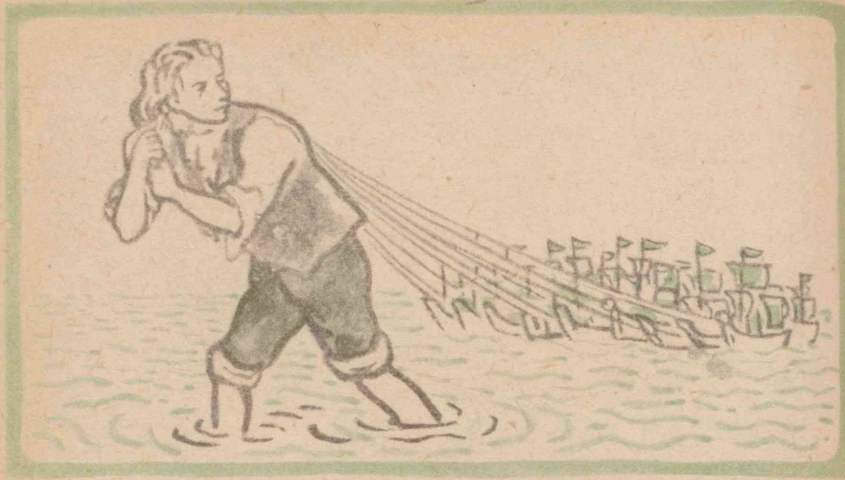
そのうちに、がやがやさわぐ声がかきこえました。足の上を、虫のようなものが、はい上がつて来るようでした。



それからまもなく、ガリバーは、町を見物することになりました。
おもちゃのようにきれいでした。
まるで、はこ庭の中を歩いているように、ちよつとでも足をすべらせたり、早く歩いたりすると、何げんもの家をふみつぶしそうになるので、ガリバーは、できるだけそつと歩きました。
少しの間に、すっかり見物してしまいました。



ある日、役人が来て、ガリバーの持ちものを調べました。
小人たちがいちばんふしぎに思ったのは、ガリバーの時計でした。
水車のような音がしたり、やりのような二本のぼうが動いていたりするの
で、中には、きつと生きものがはいつているのではないか、いや、もしかすると、神様かあくまがはいつているのかもしれないと、ふしぎがったり、こわがったりしました。

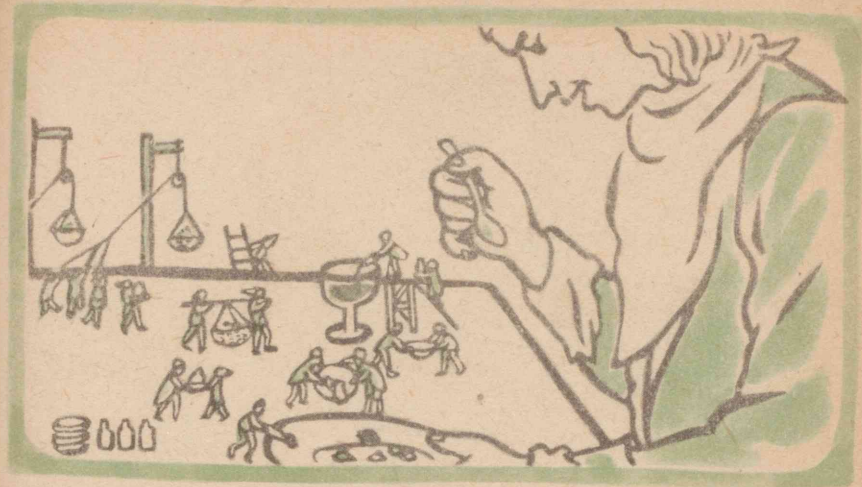


ある時、となりの小人の国から、たくさんのへいたいが、船に乗ってせめて来ました。

ガリバーは、王様からすけだちをたのまれました。

そこで、ひもの先にかぎをつけたものを何本も作りしました。

てきがせめて来ると、ガリバーは、ザブザブ海の中へはいつていつて、船にかぎをひっかけると、みんなぐんぐんひっぱって帰って来ました。



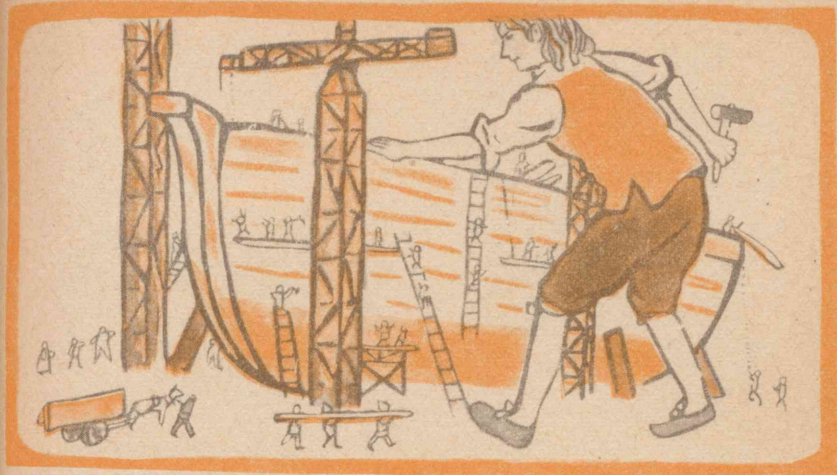
ガリバーがごはんをたべる時は、それこそたいへんです。

テーブルのまわりにあしばを組み立てて、何百人という小人が、えんやら、えんやらと、たべものや飲みものを運び上げるのですから、たいへんなさわぎです。

けれども、どのおさらの中のたべものも、ほんのちよつぴりで、いくらたべても、なかなかおなかないっぱいにはなりませんでした。



帰るとちゆうで、大きな船に出あいました。ガリバーは、その船の人たちに小人の国の話をして聞かせました。だれも、ゆめを見ていたのだろうと、いって、本気にしませんでした。そこで、ガリバーは、王様からおみやげにもらったうしやうまを、ポケットから出して見せました。おもちゃのような動物たちが、ぴよんぴよんはねまわるので、みんなは、目をまるくしました。



ある日、一そこのこわれたボートが流れてきました。ガリバーは、「これがうまくなおれば国へ帰れるぞ。」と、たいへん喜びました。王様は、大勢の大工さんをかしてくれました。ガリバーは、その大工さんをさしずして、すっかりボートをなおしてしまいました。「これで、いよいよ帰れる。」ガリバーは、どんなにうれしかったことでしょう。

このお話は、今から二百何十年か前に、イギリスの人が書いた、「ガリバーりよこう記」という本の中にあります。
「小人の国」のほかにも、大人国へわたったり、空にういている島や、馬の国へ行ったりして、いろいろなめにあう話もあります。世界中の子どもやおとなにも、よく読まれている面白いお話です。



○ 小人の国でまたどんなことがあったかと思いきや、

みなさんのすきなお話で活動しやしんを作つてごらんさい。

(二) 物まね

おもてに出て遊べない日が多くなると、たいくつでたまりません。よし子さんたちは、物まねごっこをやることにしました。一組と二組にわかれしました。

一組がもんだいを出します。二組のはるえさんが、ひとりだけ一組によばれました。

「まりつき」が、はるえさんのまねることなのです。自分の組の所に行つて、一ことも口をきかないで、みぶり、手ぶりで知らせるのです。
すぐわかりました。

こんどは二組の番です。かず子さんがよばれました。

「なわとび」これもすぐできました。

つぎは、一組がもんだいを出しました。

「ふじんけいさつかん」です。女といふことを、どうしてもあらわしません。三回こたえましたでしたが、だめでした。

それで、

おや指は―男

ひどさし指は―女をあらわすことにきめて、これだけは、指で自分の組の人に知らせてもよいことにしました。

「あんまさん」

「身体けんさ」

「しゃしょうさん」

「あかちゃん」

いろいろなおもしろいもんだいが出ます。いつまでやっても、あきませんでした。先生は、この遊びを見ておられて、あとで、つぎのようなお話をしてくださいました。

もし、わたしたちが、ことばでお話することができなかつたら、どうでしょう。じぶんの思っていることを、相手に知らせるのに、どうしたらいいでしょう。ガリバーが小人の国にいった時、おなががすいているから、何かたべものがほしいということ、どうしてあらわしたでしょう。絵をかいた

り、物まねをしたりして、知らせたことでしよう。

こちらへ来いというかわりに、手まねきしたり、

高いといふことをあらわすのに、手を高くあげたり、

大きいといふことをいうのに、両手を大きくひろげたりし

たことでしよう。ことばを知っている今の人でも、こんな身

ぶりをすることがあります。今

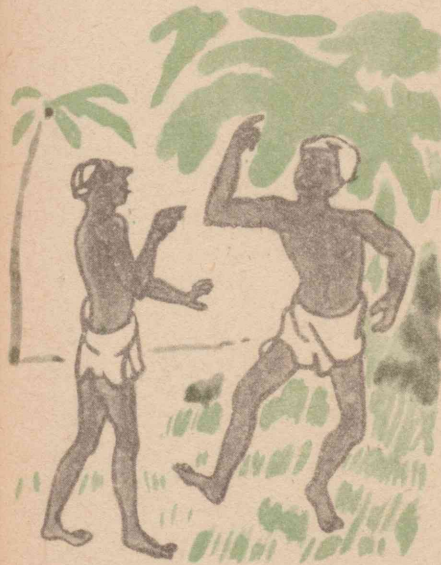
でも、ことばをたくさん知らな

いで、身ぶりや絵で用をたして

いる、ひらけなない人たちもいま

す。どんなに不便なことでは

う。話ができるということは、



たいへんありがたいことなのです。

みなさん、今から、口がきけなくなつたとしたら、どうしますか。

先生のお話が終るころには、また雪がちらちらふりだしてきました。

○ つぎのものまねをやってごらんなさい。

先生 おかあさん そうじどうばん

ゆうびんやさん

(三) 北風の中で

こま

北風寒い。

こまよ、

風きつて回れ。

くる くる 回れ。



元気な子ども。

こまよ、

負けずにうなれ。

ぶん ぶん うなれ。



明かるい日なた。

こまよ、

静かにすめよ。

すうつと すめよ。



風に負けるな
 水くむな。
 上がつてうなれ、
 ほうい ほうい。
 高い空から
 くる くるり。
 糸がきれたぞ。
 追いかける。
 青い麦畑
 ほうい ほうい。

たこ

空は青空
 風も出た。
 みんな よべ よべ。
 たこあげだ。
 うらのはらっぱ、
 ほうい ほうい。



ぼくのまっかな
 うなりだこ。

五 わたしの本

(一) わたしの本



「小包です。」

ゆうびんやさんがとどけてくださいました。

「小山じろくん」と、あて名に書いてあります。としおくんからです。うれしくて、ひもをどく手が少しふるえました。

きれいな本がはいつていました。ぎっしもはいつていました。いいにおいがします。ページを見ると、じろうの手あかがはつきりつきます。あわ



てて手をあらって来ました。

夕方になって、字がはつきり見えなくなってもむちゆうで読みました。」

おかあさんに、

「目を悪くするから、あとで読みなさい。」

といわれたので、やっとやめました。それから、にわとりやうさぎにえさをやりました。いつまでも、本のが気がかかってしょうがありませんでした。夕ごはんがすんでから、たみ子に、その本の話をしてやりました。妹は、「もっと、もっと。」といつて、ききませんでした。じろうはどこには



(二) ゆうびんやさんのぼうし

三年生も、もうじき終るので、じろうくんの組では、きょう、学芸会をしました。

お客さんは、おとうさんやおかあさんたちです。小さい子どもも大勢来たので、いっぱいでした。妹のたま子ちゃんも、おかあさんと来ていました。

楽しい学芸会

- 一、はじめのあいさつ
- 二、しょうか



- 三、お話
- 四、物まね
- 五、なぞなぞ
- 六、作文
- 七、紙しばい
- 八、お話
- 九、しょうか
- 十、手品
- 十一、げき
- 十二、おわりのあいさつ



じろうくんの番になりました。
じろうくんは、としおくんからもらった本の中から、だいすきな「ゆうびんやさんのぼうし」というお話を読みました。

ゆうびんやさんは、スキーをはいて
雪の山道をのぼりました。

ぴゅうぴゅう、風がふいて来ました。

「これはたまらん。」

と、ゆうびんやさんはいつて、首にま
いたえりまきで、ほおかむりをしました。

たいへんな深い雪です。

ゆうびんやさんは山をこえると、雪の坂を、つばめのよう
に、つういつういと、いせいよくすべっていきました。

山の向こうへ下ると、雪の原のまん中に、たてふだが一つ



ありました。

「この下に村あり」

と、書いてありました。

ゆうびんやさんは、スキーをぬぎ
ました。

すると、そこへ、ぴゅうつとまた
ひとふき風がふいて来て、あつとい
うまに、ぼうしをふき飛ばしてしま
いました。





「や、たいへんだ。ぼうしが飛んだ。」
ゆうびんやさんは、風のあとを追いか
けました。

けれども、ぼうしは雪けむりにまかれ
て、どこかへいってしまいました。

「これはなさけないことになった。」

と、ゆうびんやさんは頭をなでましたが
しかたがないので、えりまきで、ほおか
むりをしたまま、もぐらのように雪の下
のトンネルへもぐっていきました。

「ゆうびん、ゆうびん。」

こういって、ゆうびんやさんは、山の向こうから持って来た
大きなかばん一ぱいのゆうびんを、配って歩きました。

「ゆうびんだ。ゆうびんだ。」

と、いって、雪の下の村の子どもたちが、おとなや年よりとい
つしよに喜びました。

やがて冬も去り、春が来ました。

雪はとけて、土が出ました。

山をこえて、ゆうびんやさんが

てくてく歩いて、やって来ました。

大きなかばんをしょって、でも、





○ あなたのすきなお話は何ですか。
 ○ すきなお話でお話をしましょう。

ゆうびんやさん。
 ゆうびんやさん。
 ピッ ピッ。
 早くぼうしをおかぶりな。
 ピッ ピッ。
 それとも小鳥の
 すにしますか。
 ピッ
 ピッ。

頭にはぼうしがありませんでした。
 それもそのはずです。ゆうびん
 やさんのぼうしは、村のはずれの
 すももの木の頭にのっているの
 でした。
 雪がとけたので、あらわれたの
 です。
 すももの花がさいっていました。
 小鳥が歌をうたっていました。



六 春を待つ

(一) げきの会

学校では、こんど学芸会があるので、としおくんたちの組でも、しょうかやげきのれんしゅうをしています。学芸会でやる前に、組のものに見てもらって、悪いところをなおしてもらうことにしました。

どんなことをやるだろうと思って、みんな待っています。

げき——朝——

人 まさお にいさん

よし子 妹

五ろう まさおの友だち

友きち 同じ

おとうさん

声だけですがたは見えない。

おかあさん

所 まさおの家のうら庭

時 三月のなかごろ

にわとりやうしの鳴き声があります。

まくがあくと、まさおは、いどばたで顔をあらっています。

それから、うわぎをぬいで、そばのうめの木
にかけ、歌いながら、元気に体そうをします。
まさお ああ、いい気持だ。

うめの木の下を見ると、ふきのとうが、そこ
にもここにも頭を出しています。

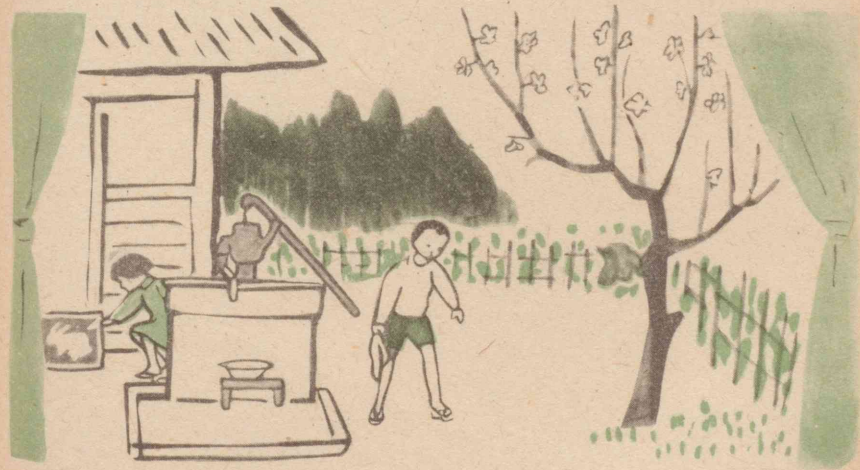
まさお おや、いつのまに、ふきのとう。

こんなになんて大きくなつたらう。

あ、あそこにも、ここにも、ず

いぶん出たなあ。

よし子がのき先のうさぎにえさをやりな
がら、



よし子 にいちゃん、もう、お顔あらって。

まさお うん。

よし子 お庭はいて。

まさお みんなしたよ。

よし子 何しているの、そんな所にしゃがんで。

まさお ほら、ふきのとうが、いつのまにか、こんなにとつ
さり出てる。

よし子、まさおのそばによって来ます。

よし子 にいちゃん、にいちゃん。みようがの芽ふんでる。

あら、わたしのうめておいたチューリップも、出て
来たわ。

まさお うれしいなあー。

よし子 なあに。ね、にいちちゃん。

まさお もう、じき春だよ。

よし子 あたたかくなるのね。

まさお、かきねの外の方をながめて、

まさお よし子、おとなりの五ろうちちゃん、やぎとおすもうとつてるよ。

よし子 おすのやぎでしよう。

まさお あれ、とつても強いよ。きょう、町のおじさんのうちへ連れていくつて。

よし子 五ろうちちゃん。来てごらんよ。いろんな芽が、ど

つさり出ているから。

五ろう やぎ、つないでいくよー。

五ろう出て来ます。

よし子 やぎとおすもうしてたの。

五ろう うん、ぼく、ぐんぐんおしつけられちゃった。

ずいぶん強いんだなあー。

よし子 五ろうちちゃん、ズボン、そんなにやぶけて、どうしたの。

五ろう やぎがつのでひっかけたんだよ。

このごろ、とつてもあばれるんだ。

まさお つのを切るといってさ。くにちゃんこのやぎな

んか、赤んぼうの時に切っちゃった。

五ろう いたかないかなあ。

よし子 五ろうちゃん、ほら、こんに

なに芽が出てるでしよ。

五ろう ほんどだ、じゃ、ぼくの

とこのもきつと出てるよ。

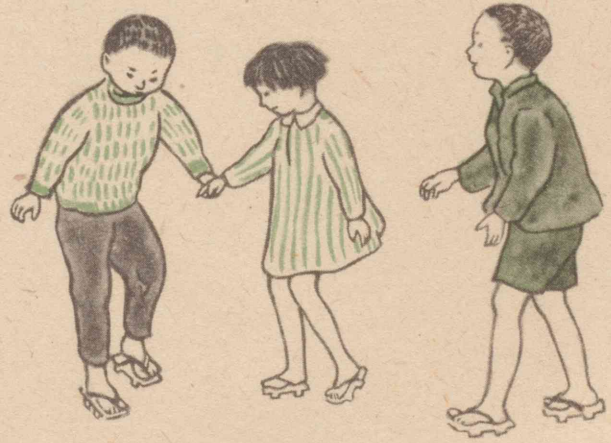
よし子 もう、じきあつたかく

なるわね。

五ろう そうかなあ。

まさお 早く春が来ればいいね。

五ろう 春が来る、春が来るって、どこから来るんだい。



よし子 にいちゃん、知ってる。

まさお

よし子 おばあさんがいつてたよ。そら、あの遠くのお山の

かげから来るんだって。

うぐいすがどこかで鳴いている声がします。

うぐいすだわ。ね、にいちゃん。

みんなじつと聞いています。

まさお このごろ、毎朝早くから、このうめの木で鳴いてる

よ。

五ろう ぼくのどこのかきねの下で、がまが鳴くよ。

よし子 がま、がまつて鳴くの。

五ろう 小鳥みたいな声だよ。ククウー、ククウー、ククウー、ククウー、
ー、つてね。

まさお ぼくも聞いたよ。とてもかわいい声で鳴くよ。

五ろう もう、じきぼくのうちのお池もおたまじゃくしでま
つくろになるよ。

まさお ほんとに春が来るんだねえ。

五ろう 春ってどんなかつこうして来るのかなあ。

まさお かつこうなんてないさ。でも、来るとわかるね。だ
れにだって。

五ろう ほんとうにあの山のかげまで来てるのかね。

まさお 知らないまに、そつと来るんだね。波みたいにあ

とからあとから来るんだよ。きつと。

よし子 にいちゃん、ね、こんなに手のしもやけなおってき
たわ。

まさお こんなに、みんなが待ってるのに。

五ろう よんでみようか。

まさお みんなでよぼう。

遠くの山に、みんなてかわるがわるよびかけます。

まさお 春来い、春来い、早く来い。

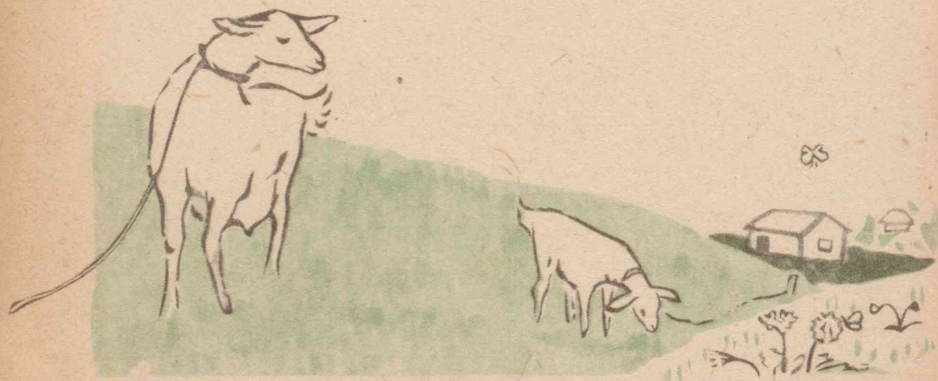
野山に、お花を まいて来い。

よし子 春来い、春来い、早く来い。

小鳥に、お歌を 持って来い。

(前奏)

友きちそうだよ。ぼくは春だよ。
 君たちによばれて来たんだ。
 よし子春ですって。
 友きちはい新聞ー。持って行って
 ちようだいね。
 よし子ええ。いいわ。
 五ろう友ちゃん、ほんとに春は、
 そこまで来てる。
 友きちことは、いつもより早く
 来るって、さっきラジオで



はるこい はるこい はやくこい

五ろう 春来い、春来い、早く来い。
 子やぎに青草持って来い。
 みんな 春来い、春来い、早く来い。
 ちようちよのはねに乗って来い。
 子ばどのせなかに乗って来い。
 友きち ここまで来てるよー。
 の声
 まさお 春かあーい。
 友きち 春だよー。
 の声
 五ろう 早くこーい。
 友きち、新聞をかかえて出て来る。
 まさお 今のは、君かい。

の やまに お はなを ま いて こ い

もいつてたよ。

よし子 いいわねえ。

まさお 君、それ、みんな配るのに、どのくらいかかる。ずいぶん早く起きるんだらう。

友きち 四時だよ。まだまっくらだ。

五ろり こわくない。

友きち みっちゃんどこのいぬ、ほえるんでいやだ。

五ろり 友ちゃん、もうじき、中学生だね。えらいなあ。

友きち 君たちだつて、四年生じゃないか。

よし子 わたし二年。新しいご本持つて、早くべつの教室に移りたいわ。

まさお それが、春つていうんだよ。

五ろり ことしは、それが早く来るつて、友ちゃん。

友きち

五ろり そうかい。

友きち そうはいかないよ。学校はきまつているからね。

まさお でも来るには来るんだ。運動場のさくらがさいてさ。

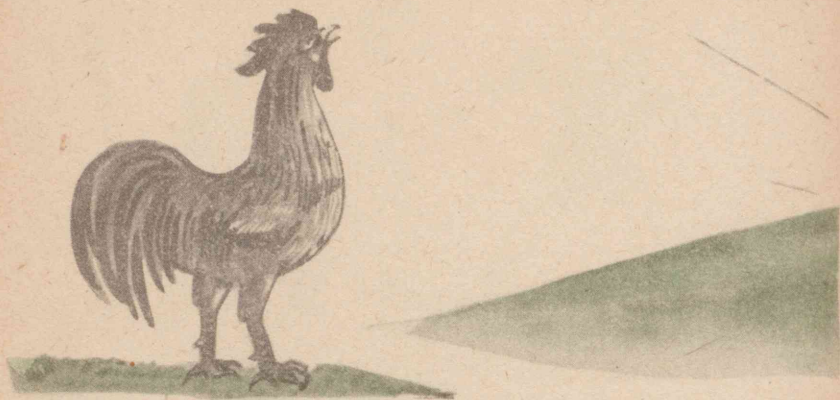
五ろり ぼくもまさおさんも、四年生になつて――。

友きち そうだよ。みんな春のおかげだ。

五ろり 春つていいね。なんでも新しくなつて。

カアカアと、からすの声がかきこえる。

よし子 そら、森が、あんなにきれいなもも色になつたわ。



まさお うん、手つだつてあげる。
五ろうが帰ります。家の中から、おかあさん
の声が聞こえてきます。

おかあさん まさおさん、もう、ごはんです
よ。

おとうさんをよんでちょうだい。
まさお はあーい。

まさお、たんぼの方を向いて、

おとうさあーん。

おとうさあーん。ごはんですよ



友きち あつ、もう日が出る。しっけい。
友きち、あわてたように出ていきます。
よし子 にいちゃん、わたし、新聞をお
いて来る。

まさお にわとりを出してやってね。

よし子 はあい。

よし子、家の中へはいります。

五ろう そうだ。ぼくは、やぎを町に連
れていくんだっけ。

まさおさん、学校に行く時、よ
つてね。



お日さまが、きらつと森の上に出ます。

まさお あつ、まぶしい。

両手で目をふさぐひょうしに、ガラんと、せんめんきを落とします。

ボン、ボン、ボンと時計が六つ鳴ります。

にわたりの声や、うしの鳴き声がして、まくがしまります。



うー。

返事はありません。

まさお おとうさあーん。

おとうさあーん。

おとうさん おーい。

まさお ごはんですよう。

おとうさん いまいくよう。

まさお うわぎを着て、手ぬぐいとせんめんきを持って森の方をながめます。

やった人は、ひろしくん、はるえさん、しげるくん、ただしくんたちのほか、かげでよんだり、鳴き声をまねしたりする人が四人いました。

終ってから、みんなて話し合いました。悪かったところは、つぎのようでした。

◇ とちゅうでつかえたり、いいなおしたりした。

◇ あまり早すぎて、わからないところがあつた。

◇ はずかしがつて、みんなの方に向かない。

よいといわれたところは、つぎのようでした。

○ いい方がうまい。ほんとうにそう思っているようだ。

○ 身ぶりも、ずいぶんくふうしている。

(二) 春の川



川ばたのやなぎの芽が、いつのまにか出ている。のき下のうめの木も、一つ二つさき始めた。

あまだれが、

ポタン、ポタンと落ちて、

きようは、あたたかい。

雪は川をうめているが、

雪の下に水の音がきこえる。(しげる)





ぽかぽかと、

あたたかい朝だ。

小川がさらさらと流れている。

せりの青葉がゆらゆらゆれる。

取りたいなあ。

ふきのとうも出ている。

(はるえ)



新しく出たことば

○ あつっ	十二	いぬ小屋	七十七	おこうこ	十四
あらわす	十五	いたずら	七十七	おか	十六
あさり	二十一	いきもの	七十八	大むかし	二十
あいず	二十八	いろいろな	八十四	思いついた	四十一
あおだいしょう	三十四	いどばた	百七	大雪	五十九
青白く	六十二	いいなおし	百二十四	(風も)おさまり(おさまる)	六十一
あきらめて(あきらめる)	六十二	○ うまおい	十	おとも	六十二
あきばこ	七十三	うり	十四	お寺	七十七
あくま	七十八	受け取る	二十八	おもちゃ	七十九
あしば	八十	うなつて(うなる)	三十五	おや指	八十六
あんまさん	八十六	うなりだこ	九十二	お話会	百五
あきません	八十七	うわぎ	百八	おすもう	百十
相手	八十七	○ えもの	六十二	かきね	九
赤んぼう	百十二	えりまき	百	がけ	二十
青草	百十六	○ お茶	十三	川上	六十八
○ 急ぎ足	三十八				
いいただき	六十五				

かやぶき 七十
かぎ 八十一
学芸会 九十八
かばん 百三
がま 百十三
かつこう 百十四
川ばた 百二十五

○ きよろきよろ 三十一
きじ 三十八
きせつ 三十八
ぎょうれつ 七十七
(口が)きけない 八十九
気にかかって(かかる) 九十五

くつわ虫 十
くぬぎ林 三十八
組みふせて(組みふせる) 六十八
グレヨン 九十六
くばって(くばる) 百三

○ そうつと 五
外がわ 七
そうじどうばん 八十九

○ たいてい 十七
玉入れ 三十
たんけん 四十七
たび 五十七
たぬき 六十二
たいぶ 六十四
たき火 六十四
たちきられて(たちきられる) 六十六
たおして(たおす) 六十八
大工さん 七十一
大人国 八十四
たこ 九十二
(これは)たまらん 百
体そう 百八

○ こぼれて(こぼれる) 十二
工場 七十一
こわれて(こわれる) 七十六
こわがったり 七十八
こま 九十
小包 九十四
子ども文庫 九十七

○ ぎら 十一
さんねん 二十九
さお 三十
さなぎ 三十四
さぎんか 三十五
さして(さす) 三十六
ささやぶ 五十三
さしず 八十二

ちぎれた 三十七
ちよっぴり 八十
チューリップ 百九

○ 土色 八
つういつうい 百
つないで(つなぐ) 百一
つかえたり(つかえる) 百二十四
手まねき 十三
テンプル 八十
手ぶり 八十五
手あか 九十四
てくてく 百三

○ どける 三十六
どけて(どどける) 九十四
どこ 九十五
としより 百三
どっさり 百九

○ しまもよう 二十
じまつた 五十二
しきりに 六十六
しゃがんで(しゃがむ) 百九
しっけい 百二十

○ すいっちょ 五
進みました 二十三
するすると 三十四
すがた 六十五
すめよ 八十一
スキー 九十一

○ せめて(せめる) 八十一
せんめんき 百二十三
せり 百二十六

○ のろい 四十八
のみもの 八十
のき先 百八
野山 百十五

○ はまぐり 二十一
はぐれない 二十二
バトン 二十九
春さき 三十六
はんでん 四十四
はだし 四十五

○ むれ 三十三
 向こう岸 六十六
 麦まき 七十二
 ○ めいめい 四十一
 ーめにあう 八十四
 ○ もれて(もれる) 六十二
 持ちもの 七十八
 物まねごっこ 八十五
 ○ やかん 十二
 役場 二十
 山おく 六十九
 役人 七十八
 やり 七十八
 やぎ 百十
 ○ ゆれました 八十九
 ゆうびんやさん 五

ゆるんだ(ゆるむ) 九十六
 雪けむり 百二
 ○ 理科教室 十七
 両はし 七十三
 りよこ日記 八十四
 ○ れんしゅう 百六
 わかれわかれ 八
 わたり鳥 三十三
 わく 三十六

はずと 六十四
 鼻をならしながら 六十四
 ばか 六十八
 はぜ 七十二
 はりがね 七十三
 はば 七十四
 はまべ 七十六
 はい上がって(はい上がる)七十六
 はつきり 九十五
 ○ びくびく 六
 ひぎ 十四
 ひよどり 二十四
 日だまり 三十四
 ひなたぼっこ 三十四
 ひやひや 三十八
 ひこうき 四十八
 ひっかける 八十一
 ひらけな 八十八
 表紙 九十六
 ひまうしに 百二十三
 ○ 文 十五
 ふえ 三十一
 ふいに 三十八
 ふわり 四十一
 ふるえながら 五十五
 ぶな 五十八
 ふぶき 六十一
 ぶらさがる 七十二
 ふみつぶし(ふみつぶす) 七十九
 ふじんけいさつかん 八十六
 ふきのとう 百八
 ふさぐ 百二十三
 ○ へいたい 八十一
 ○ ほえたてました 五十二
 細長く(細長い) 七十四
 本気 八十三
 本ばこ 九十六
 ほおかわり 百
 ぼかぼか 百二十六
 ○ 曲がった(曲がる) 二十
 曲がりかど 二十九
 曲がりきれずに 二十九
 まっさかさま 六十四
 まぶして(まぶす) 六十九
 まつたけ 七十二
 まわりぐあい 七十四
 まけずに 九十一
 ○ みどり色 六
 みせあいました 八
 みかんばこ 五十二
 みごと 六十四
 みやこ 七十七
 みぶり 八十五
 みようが 百九

かん字

入	(7)	返	(7)	土	(8)	色	(8)	放	(9)	茶	(11)	湯	(11)	包	(12)	始	(14)	飛	(14)	止	(14)	飲	(15)	理	(17)
科	(17)	拾	(17)	運	(18)	休	(18)	役	(20)	曲	(20)	横	(20)	黄	(20)	屋	(21)	回	(22)	庭	(22)	深	(22)	進	(23)
実	(24)	登	(25)	落	(25)	席	(28)	番	(28)	受	(28)	息	(29)	等	(29)	玉	(30)	投	(30)	連	(31)	勢	(33)	残	(34)
輪	(35)	美	(35)	氷	(36)	張	(36)	楽	(37)	冷	(37)	畑	(38)	暗	(38)	着	(44)	買	(44)	借	(44)	悪	(50)	辺	(53)
寒	(53)	別	(54)	続	(56)	燈	(61)	消	(61)	喜	(61)	静	(62)	鉄	(63)	橋	(65)	似	(66)	岸	(66)	岩	(66)	働	(69)
炭	(69)	引	(69)	工	(71)	様	(72)	活	(73)	乗	(76)	船	(76)	寺	(77)	行	(77)	都	(77)	調	(78)	神	(78)	指	(86)
身	(86)	体	(86)	相	(87)	明	(91)	系	(93)	表	(96)	庫	(97)	芸	(98)	客	(98)	品	(99)	坂	(100)	去	(103)	芽	(109)
移	(118)																								

教師のページ

子供の生活経験と興味とをもとにして、六つの題目をとりあげた。それに、話す、聞く、読む、書くといった国語のはたらきを組み合わせることによって、この本が構成されている。

一、秋

(一) 虫取り

地方によって虫取りの方法もちがうことだらう。

こくご六には、今までよりもぐっと長い文が多い。表現の上にも、多少変化がある。

(二) お茶はこび

子供の作品によって書かれたもの、子供の感覚があちこちに出ている。とりいれごろになると、三年生の子供でも、農村ではなくてはならない存在になる。そうした生活の中にはまた、好ましい作文や詩が生まれて来るものである。

(三) となり村へ

長い文、田うえ時に、としおの父が手伝いに行つたことのある村へ行つた時のことである。理科の教室、がけ、がけの上、林の中、それぞれの場所を頭にえがいて、その場所での出来事をまとめていくのも、文を読む一つの方法である。ひよつと迷ひ子になつてしまつた経験は、子供たちにあることだ。話し合つてみると面白い。

(四) 運動会

楽しいスポーツを通して、責任、協力というようなことを知らせて行きたい。遠足とか運動会というテーマについて話し合つたり、作文を書いたりする場合には、とかく、焦点がぼやけてしまふから注意しなければならぬ。

二、冬が来る

(一) 森の小道

スケッチ風の形によつて冬が来るころの風物をつかんだもの。季節がわかるにつれて、まわりのものも変化していく。子供たちにも、それに気づかせたい。いっしょに

歩いてみるのもよいことだ。

(二) 音

「秋」が大体、読む仕事に重点をおかれてあったが、ここでは物をよくみ、音や言葉をよくきくことに注意をむけさせたい。

太陽といえば、キラキラ、桜といえば、チラチラというように相場がきまつている。もつと個性を生かした表現の法がないものだろうか。

(三) 弟のことば

他人の言葉を観察することは、また自分の言葉をみかくことにもなる。弟や妹ばかりでなく、もつと広い範囲にわたつて考えさせてみたらよい。それが単なるあらさがし、ことばじりをつかむといったようなことにならないように。

荒井不二男氏の文によつた。

(四) いの字の世界

単語の分類法を教える積りはない。ただ語法がこんな形で取り扱われていくことは望ましいことである。終りにの字のつく

北の国のじろりの作文と、南の国の友子の手紙を、対称的にのせてある。これだけ自然風物がちがうように、言葉もちがっている。実際の作文も手紙も、ここにのせたようなものではない。

四 楽しい遊び

(一) 活動写真

三年生ころになると、けっこう、ひとり物をつくるようになる。のこぎりや、金づちを持ち出して手をきずつけている。これだけの文章とさしえから、子供たちは活動写真機をつくれることだろう。

ガリバーの小人国のところをフィルムにおさめてあるが、この写真機を生かすなら、フィルムのこまを多くすることである。

何人かで協力してやってみると、いいものが出来る。フィルムの回転によつて、多少なりとも動きが感ぜられるものが出来る。

(二) 物まね

大昔の人たちの生活、ことばが出来るま

言葉といったのは、動詞ならば「ら行」活用
の終止形が出て来ることになる。

この詩は、與田準一氏のもの。

三、雪がふる

(一) 子うさぎ

かわいい子うさぎの行くえを思う子供の心情と、寒い冬が訪れて来たことを思わせる文である。この文を読んで子供たちは、どんな感想を持つことであろうか。

(二) 雪

作品はどれも、子供のものである。子供たちは詩の指導を本格的にはじめてもよい時になっている。

(三) 冬の山

山村にしても、めずらしい狩猟の光景である。ここに出て来る山の英雄くろは、夏休みに、としおが訪れた時、やたらにほえていた。あの犬である。

(四) 炭をやく人

(五) 南から

での苦勞を考えてみたい。ことばが話せない人たちのこと、ヘレン・ケラーのようなことを考えさせてみたい。

物まねあそびは一種の創作である。このような遊びに子供がその意外な能力をあらわすことのあるのに、驚くことだろう。

(三) 北風の中で

寒いといって、家の中にはばかりはいつていないで、外にも出てみよう。

うなりだこがうなっている。風の中で子供たちがこまをまわしている。そして寒さも忘れている。

五、わたしの本

(一) わたしの本

本は一部にはあふれており、一部には殆んどいつていない。一冊の本さえ手に入れることが困難なところもある。そして、どこでも読書の指導はあまりなされていない。

この課は読書指導の第一歩の意味をもつ。ささやかでもいい、子供文庫か、学級文庫

Copyright 1950, by
The Nihon Shinkyōiku Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国314

左の作品を本書に掲載させていた
だきましたことについて、著作者諸
先生に心から感謝をいたします。
なお、諸規則および指示によりま
して、漢字・かなづかいその他多少
の修正をおわびいたします。

「弟のことば」……………荒井不二男
「いの字の世界」……………與田 準一
「ゆうびんやさんのぼうし」……………
……………小出正吾

感謝

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

昭和二十五年 昭和二十五年	月 月	日 日	定価 円
著者	日 行	財団法人	日本新教育研究会
発行者	代表者	代表者	代表者
印刷者	代表者	代表者	代表者
発行所	代表者	代表者	代表者

(本書の指導書・ワークブック・註釋書並びに、
これに類する一切のもの無断發行を禁ずる。)

表紙

中尾 彰
成蹊学園小学校主事
成城学園初等学校教諭
学習院初等科教諭
同
成蹊学園小学校教諭
野村純三
齋藤長三
中尾 彰

担当執筆者

成蹊学園小学校主事 滑川道夫
成城学園初等学校教諭 馬場正男
学習院初等科教諭 杉山勝榮
同 山田造
成蹊学園小学校教諭 野村純三
野村純三
齋藤長三
中尾 彰

編者

こくご 六

東京都大田区雪ヶ谷町 清明学園内
財団法人 日本新教育研究会
理事長 濱野重郎
編集長 照井猪一郎

六 春を待つ

(一) げきの会

演出後の感想をあげている。こうした話し合いが、劇が終わってからばかりでなく、いつでもなされることが望ましい。そうしたことが、むしろ学校劇の生命であるといつてもよいだろう。

(二) 春の川

雪の下には水の音がきこえる。

が作られていくようにしてほしい。
(二) ゆうびんやさんのぼうし
学芸会、げきの会、それらは子供たちの待ちこがれているものである。いよいよ三年生も終ろうとするころ、自分たちの学習の結果を、展覧会、学芸会で、まとめていくのも一つの方法である。子供たちは張り切って、プランをつくり、実行していくにちがいない。
この話は小出正吾氏の作である。ほおえましい、ユーモアのある作品である。

せりの葉がゆれる。
ふきのとうが出る。
春だ、そして四年生へ。

本文の終りに問題のついでに、三・四年時代にある。決してこれにとらわれることなく、学習をすすめてもらいたい。ただ三年生は三年生なりに、自分で研究していく態度を作ってやりたい。
漢字の提出については、三・四年時代に最も多くする予定、基本的なものには中学年で修得させる方針である。

庫
50
810

広島大学図書
0130449810
